



▼あこがれ▼

校長 小田 恵

2年前、ローマ教皇フランシスコは「識別」という言葉をテーマに、連続講話をなさいました。「識別」という言葉を日常的に使わない私ですが、この講話集を読んでなるほど、と腑に落ちた部分がありましたので、ぜひ皆さんとも共有したいと思います。

「識別」とは、適切なタイミングをとらえるために、知恵、経験、感情、意志を生かすことである。これらはよい選択をするための条件であり、賢い選択には、知恵と経験と意志は必須である。「識別」を働かせるには犠牲も必要になる。人生においては想定外の状況で迫られる選択の重大性と緊急性の見極めが欠かせず、また、その決断は一人ひとりが下さなければならない。だから「識別」のしかたを知ることが大切だ、と教皇は語っています。私たちの日々の生活にも様々なレベルで「識別」を働かせなければならない局面があります。洛星で学ぶ若者たちにも、これから受験校の選択、将来の進路だけでなく、様々な決断が必要になります。

「識別」の基礎として、教皇は、「主イエスに親しむこと」、「己を知ること」、「あこがれ」をあげています。ここで教皇がいう「識別」は信仰を生きる上で不可欠なものです、「信仰」という言葉を、「正しく生きること」と考えられないでしょうか。そして、それには「あこがれ」も必須なのです。

「あこがれ」は、根本的に完全にはかなうことはない充満への切望と定義されます。「あこがれ」は一時の欲求ではありません。「あこがれ」は英語で「desire」と表されますが、これはラテン語「de-sidus」(＝星がない：de=脱 + sidus =星)を語源とします。「あこがれ」は星を欠いた状態、すなわち、人生を導く基準が見えない状態で、それは苦しみや欠乏感を呼び起こし、さらに、手にしていない幸福に至るための切迫さを生み出すもの。だから「あこがれ」は自分が、どういう状態なのか、どう進めばよいかを教えてくれる羅針盤のようなものとも言えます。そして、真の「あこがれ」は、一時の欲求や感情とは異なり、継続するもので、どんな困難や挫折があろうとも、消えず、実現へと向かうものなのです。

私が「あこがれ」ということばから思い起こすのは、平安時代に書かれた『更級日記』の一節です。

「東路の道の果てよりも、なほ奥つ方に生ひ出でたる人、いかばかりかはあやしかりけむを、いかに思ひはじめけることにか、世の中に物語といふものあんなるを、いかで見ばやと思ひつつ、つれづれなる昼間、宵居などに、姉、継母などやうの人々の、その物語、かの物語、光源氏のあるやうなど、ところどころ語るを聞くに、いとどゆかしきまされど、わが思ふままに、そらにいかでかおぼえ語らむ。いみじく心もとなきままに、等身に薬師仏を造りて、手洗ひなどして、人まにみそかに入りつつ、「京に疾(と)く上げ給ひて、物語の多く候ふなる、ある限り見せ給へ。」(以下略)

高校古文では必ず学習するこの一節。菅原孝標女の物語と物語の世界への強い気持ちが表れ、そしてこの「あこがれ」によって彼女は人生を進んでいきます。

(*もし、この部分??の高校生がいたら、校長室に質問にきてください)

ありとあらゆるものに囲まれ、豊かに思える現代社会に生きる日本の若者たちにとって、真の「あこがれ」を持つことは容易ではないかもしれません。しかし、身近な先輩が輝く姿にあこがれることから始めることができます。先日の高1京大キャンパスツアー、OB講演会なども「あこがれ」をもつ機となるでしょう。洛星で学ぶ若者たちが、「識別」の材料としての「あこがれ」を持ち、将来自ら輝く星となってくれることを祈っています。